

【個人研究】

非行性の認定（Ⅷ） 補 遺  
その1 心理検査による非行性のアセスメント(2) :  
ロールシャッハ・テストおよびTAT

進 藤 眸\*

**Studies on Differentiating Delinquency(8th Report)  
Supplementary Reports  
Part 1 Assessment of Delinquency with Psychological Tests (2) :  
the Rorschach Test and the TAT**

**Hitomi SHINDO**

Present study was intended to obtain methodologically valid and efficient information about the assessment of delinquency with the Rorschach Test and the TAT. From among 63 collected literatures on the Rorschach Test and 28 collected literatures on the TAT, 16, 6 literatures were, respectively, selected according to the purpose of this study, and were analyzed mainly from viewpoint of (1) their contribution to the assessment of delinquency, and (2) their methodological advantage.

As a result, it was founded that as for the Rorschach Test, (1) until the 1980's, studies on 'impulsivity' which seemed to influence the occurrence of delinquency for some reason, and those on 'psychopath' and/or conduct disorder which were closely related with the severity of delinquency, had been much pursued by comparing with normal groups or with mild disturbance groups, and (2) after the 1990's, studies on 'psychopath' and/or 'aggression', have increased.

These findings suggest that hereafter, it is more practical to analyze the mechanism of the occurrence of delinquency with the Rorschach Test for conduct disordered juvenile delinquents, particularly by bringing focus into 'impulsivity' and/or 'aggression', in Japan.

**Key words** : delinquency, juvenile delinquent, Rorschach Test, TAT, psychopath, conduct disorder, impulsivity, aggression.

非行性、非行少年、ロールシャッハ・テスト、TAT、精神病質、行為障害、衝動性、攻撃性

1. 問題の提起

非行少年の非行性を査定する補助手段とし

て投映法を使用するとすれば、なにを選定するであろうか。わが国の非行臨床のサイコロジストは、第一にロールシャッハ・テスト（以下、「ロ・テスト」と略す。）、第二にTATを挙げるであろう。なぜなら、この二つ

---

\*しんどう ひとみ 文教大学人間科学部臨床心理学科

の検査は、非行少年のアセスメントにおいてとても役に立ち、よく研究されてきているからである。ただ、この二つの検査は、その分析や解釈にかなり熟練を要し、長期にわたる臨床経験を積まなければならないし、それぞれが得意とする測定領域があり、「切れ味」を異にしているため、目的に応じて使い分けで利用する必要がある。

いまから50年前、Lyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958)は、「非行の問題は、本来、特にロールシャッハのような知覚的な技術においてよりは対人関係の場面においてより見いだし得る」と述べているが、この研究を進めるにあたって、彼らという「非行」を「非行性」と置き換えて問題点を整理すると、次のとおりである。

最初に、非行性の問題を対人関係に力点をおいて分析してよいかという問題である。非行性のアセスメントにあたって対人関係を分析することは欠かせないが、対人関係は、パーソナリティを形成するさまざまな次元ないし要因によって規定されるものである。認知のゆがみや情緒性も、当然にそこにかかわっているため、ロ・テストのF (+)で測定される現実吟味能力 (reality testing) のほうが、TATで測定される対人関係よりも重要な意味をもつ場合も、あり得る。

他にも、非行性にかかわるパーソナリティの次元ないし要因は、数多く存在する。したがって、ロ・テストだ、TATだと言わずに、これら二つのテストが共通に測定する、パーソナリティの次元ないし要因を探し出すことも、大切である。

ここで、改めて考えておかなければならないのは、「非行性をどうとらえるか」ということである。非行性のとらえ方次第によっては、テストへの期待も、その利用の仕方も異なってくるからである。

私 (1971) は、かつて構造化パーソナリティ・テスト (structured personality test) の代表とされるMMPIでは、非行性の概念は二つの次元、すなわち、問題行動を生じやすい

「ひずみをもったパーソナリティ」という次元と、非行性の発現を決定づける「非行傾性 (delinquency proneness)」という次元からとらえられる、と指摘した。「ひずみをもったパーソナリティ」という次元でとらえていく場合には、非行群と非非行群とを有意に識別する質問項目によって構成される尺度によって測定されるものが、すなわち、「非行性」であるという考え方に立脚する。「非行傾性」という次元からとらえていく場合には、非行の発現を決定づける「傾性」を重視し、それを「非行性」と同義的に使用している。すなわち、Hathaway, S.R. & Monachesi, E.D. (1963) は、「非行傾性」を「弱から強への連続性をもった、つまり単一の連続変数としての非行の蓋然性に寄与する多くの個人・環境因子の平均的複合」と定義しているが、こうしたとらえ方は、パーソナリティ以外の次元を重視する考え方に根ざすものである。

非行性を「ひずみをもったパーソナリティ」という次元からとらえる場合に問題になるのは、精神病質やDSM-IVの行為障害と反社会性人格障害との関係である。特に行為障害や反社会性人格障害では、非行があることが診断の指標とされているので、トートロジー (tautology: 同義反復) のそしりを免れない。これらの広義の人格障害を問題とするのであれば、むしろそれぞれの障害の下位類型をどのように設定し、査定して、それぞれに対応する処遇 (treatment: 非行少年を扱う場合には、司法的な処分から教育、治療までを含む。) をどのように準備するかということが、問われなければならないだろう。

非行性を特定のパーソナリティ特性との関係から見ていくことも、忘れてはならない。かつて非行少年群と高校生や大学生に代表される一般群 (対照群または非非行群) とを比較検討し、統計的に有意な差が認められた指標や比率を非行少年の特徴としてとらえる研究が多く存在した。一例を挙げると、Curtiss, G., Feczko, M.D. & Marohn, R.C. (1979) は、38人の正常の被験者と30人の非

行のある被験者のロ・テストの反応をBeck, J. (1961)の方法によってスコアし、パーソナリティの次元を表すロ・テストの尺度を線型判別分析して、群間に非常に有意かつ正確な差が認められた ( $p < 0.005$ 、正確分類率 = 86.8%)と報告している。彼らの研究は、方法論的にかなり精練され高く評価されるが、ここで改めて、この研究のテーマである投映法による非行性のアセスメントの視点から見直すと、三つの問題が浮かび上がってくる。

一つは、非行少年のパーソナリティを理解する枠組みの問題である。例えば、ある殺人の少年にロ・テストを実施し、解釈した場合を考えると、一見、その個人特有のパーソナリティを理解することができ、非行の発現のメカニズムに接近することができそうに思われる。ところが、ここで注意しておかなければならないのは、解釈の仮説の独断専行である。解釈にあたって指標や比率を取り上げるのはよいが、ノーマティブ・データから得られた平均値と比較して、数値が高ければ、その指標や比率に付与された仮説をそのままその個人のパーソナリティの特徴として理解してしまう過誤を犯しかねない。

この過誤は、群間で比較した場合に、更に深刻になる。例えば、非行少年100人にロ・テストを実施し、 $FC/CF+C$ が1.4となったことから、「理性的制御が不十分な衝動的行動に出る傾向が多い」と解釈した文献があるが、直接、比較すると、 $FC/CF+C$ は38人、 $CF+C/FC$ は35人であり、平均が全く意味をもたないことが分かる。投映法の解釈にあたっては、個人間比較ではなく、個人内比較をすることが、前提となる。その個人がどういう反応を出し、どのような特徴を有するかを分析したあとで、群全体の特徴をつかむようにすべきである。

ここで、更に重要なのは、指標や比率をまとめる理論的な枠組みである。ロ・テストについて説明すると、例えば、Sciara, A.D. (1990)は、Exner, J.E.のロールシャッハ・ワークショップ(1989)に基づき、全体的な解釈の枠

組みを準備した上で、司法分野における青年の事例を分析しているが、一つの理論的な枠組みに従って分析対象者の全体像を把握する姿勢が、投映法の解釈では求められる。「部分」をいくら集めても、「全体」には成り得ないのである。

さらに、非行少年を理論的に分析する基準をあらかじめ準備し、そこから逆に投映法を見ていくという方法も、開発されてしかるべきである。実際に、こうした方法が、どの程度、どのような形で採用されてきたか、そのことについても、目を向けていかなければならない。

二つは、パーソナリティと非行性の関連性の問題である。平均的基準を導入すれば、一般の高校生よりも非行少年のほうが、警察の補導のみで終わった少年よりも少年鑑別所に収容された少年のほうが、いずれも非行性が進んでいると考えられる。しかしながら、その場合に、パーソナリティのどの部分が非行性と結びついているか、一歩進んで説明を求められると、直ちに回答に窮するのが実情である。

最近の研究では、衝動性や攻撃性が非行の発現にかかわっているとされるものが目立って多いが、衝動性が強ければ強いほど、攻撃性が強ければ強いほど、非行性が高まるかといえば、必ずしもそうとは言えない。非行性を多くのパーソナリティ要因の複合であると考え、どのような要因をどのように結びつけるかという、新たな問題が生じてくる。

三つは、パーソナリティを査定する技術上の問題である。これは、上述の二つの問題と密接にかかわるが、ここでの隘路は、投映法特有の「刺激構造のあいまいさ」に大きく依存すると言ってよからう。Lyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958)が非行少年のTATの分析において大切なことは「主題の分類ではなく、空想や防衛機制の解釈」であるといみじくも喝破したのは、この間の事情を物語るものである。TATに限って言えば、スコアリング・システムの標準化が進んでいない

し、少し古いが、Haynes, J.P. & Peltier, J.(1985) が指摘しているとおおり、アメリカにおいてでさえ、少年司法の心理クリニックに所属するサイコロジストで特定のスコアリング・システムを利用していると回答した者は5パーセントに満たないのである。

この種のテストを使用して研究を進めていくにあたっては、研究者自身が、当該の検査法を自由に駆使できる非行臨床の専門家でなければならない。欲を言えば、さらに、テスト結果を評定する際に介入する個人的なバイアスを軽減するため、相互チェック体制が確立されていることも、求められよう。

したがって、われわれは、このような研究を取り巻く厳しい制約を、一つ一つクリアしていかなければならないが、差し当たって私にできることは、ロ・テストとT A Tで非行性を扱っている研究になるべく多く、丹念に目を通し、今後の作業の見通しと指針を得ることである。

## 2. 研究の目的

この研究の究極の目的は、ロ・テストおよびT A Tによる非行性のアセスメントに関する方法論上の妥当かつ効果的な情報を入手することであるが、その前提として、「1 問題の提起」で指摘した制約をできる限りクリアしておく必要がある。したがって、この研究の対象として採用した文献のうち、非行性を査定する構造的性を有し（第一次選定）、かつ、標準化されたスコアリング・システムを導入しているか、理論的に非行ないし非行少年を理解しようとしているか、のいずれかの条件を満たすもの（第二次選定）を取り上げ、それらが、

- (1) 非行性のアセスメントにどのように役立っているか（「非行性のアセスメントへの寄与」）
- (2) 方法論上の利点があるとすれば、どのような点であるか（「方法論上の利点」）について分析する。

次に、

- (3) どのような研究が最近、多く実施されているか（「最近の研究動向」）について分析する。

以上の分析を通して、投映法、特にロ・テストおよびT A Tによる非行性のアセスメントのあり方を総合的に検討し、この分野における研究のあるべき方向を模索する。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献の選定

文献検索機能を利用して、欧米語の文献についてはPsycINFO(EBSCOhost)で「delinquency」と「Rorschach test」および「delinquency」と「T A T」、日本語の文献についてはCiNiiで「非行」と「ロ・テスト」および「非行」と「T A T」の、それぞれ二つの条件を満たす文献を抽出する。抽出された文献数は、2006年8月1日現在、ロ・テストについては欧米語161編、日本語7編、T A Tについては欧米語88編、日本語10編である。

ここで、「delinquency」から「delinquency trend」、「非行」から「非行傾向」へ、それぞれ絞り込む必要があるため、文献のタイトルおよび抄録に基づき、条件を満たさないものを除外し、ロ・テスト37編、T A T 19編を残すことにする。

なお、日本語の文献についてはCiNiiの機能に限界があるので、独自に、学会誌、専門雑誌等を調べ、ロ・テスト26編、T A T 9編を、それぞれ追加する。

このようにして最初に収集した文献、すなわち、ロ・テスト63編、T A T 28編を対象に第一次および第二次の選定を行い、分析の対象とする文献を決定する。

- 第一次選定にあたっては、(1) 方法論的に非行性を査定する構造的性を有しているか、第二次選定にあたっては、(2) 標準化されたスコアリング・システムを導入しているか、(3) 非行少年を理論的に分析する基準をあらかじめ準備しているか、をそれぞれ目安とす

る。

#### (2) 文献の分析方法

文献の分析方法は、(1) 非行性のアセスメントへの寄与、(2) 方法論上の利点、については、それぞれ個別に分析する。

(3) 最近の研究動向については、1990年以降に発表された文献を取り上げ、個別に分析する。

### 4. 結果と考察

#### (1) 文献の選定

分析の対象とする文献として最終的に残ったものは、表1および引用文献に示したとおり、ロ・テスト16編、TAT6編(「最初に収集した文献」に占める比率は、それぞれ25.4パーセント、21.4パーセント)である。

第一次選定において選定されなかった文献

について「非選定」の理由を見ると、ロ・テストでは「対照群を設定していない」が5編(12.8パーセント)と最も多く、次いで、「文献の概観」「犯罪者類型間の単純比較」がそれぞれ2編(5.1パーセント)であり、TATでは「対照群を設定していない」が4編(66.7パーセント)と最も多くなっている。

第二次選定において選定されなかった文献について「非選定」の理由を見ると、ロ・テストでは「群による指標・比率の比較に終わっている」が7編(87.5パーセント)で圧倒的に多く、TATでは「原著を入手できない」が3編(50.0パーセント)を占めている。

以上の結果から、対照群を設定せず、また、設定していても、群間をテストの指標・比率によって単純に比較した文献が相対的に多い、とすることができる。

表1 分析の対象とする文献の選定

検査名	最初に収集した文献	第一次選定			第二次選定		
		計	欧米語	日本語	計	欧米語	日本語
ロ・テスト	63	24	18	6	16	14	2
TAT	28	12	9	3	6	6	—

#### (2) 非行性のアセスメントへの寄与

##### a. ロ・テスト

Schachtel, E.G. (1951) は、有名なGlueck, S. & Glueck, E.が非行予測の研究で用いた500人の非行少年群と500人の非非行少年群のデータを再利用して比較研究し、反応数(R)、Dd反応、S反応ならびにMおよびMt(人間または人間類似以外の運動)反応において非非行群に有意に反応数が多いことを見いだしたが、「全体として、非行少年と非非行少年間の個々のロールシャッハ得点における差は、類似点の場合よりも極めて小さい。この差は、ロールシャッハの記録についての全体的な構造が、量的な分析法よりも

しる質的な分析法を用いて研究されたとき、いっそう顕著になる」と結論した。

非行少年群と非非行少年群とを比較研究した研究は、高橋雅春(1956)ほか3組の研究者によって実施されており、その概要は、表2に示したとおりである。16例中4例がこうした比較研究であることは、注目に値する。

Ostrov, E., Offer, D., Marohn, R.C. & Rosenwein, T. (1972) は、ロ・テストの色彩への反応性の三つの測度およびWAI SとWISCの動作性と言語性とのIQ間の差の量に着目し、非行の発現において重要な役割を果たすとされる衝動性の客観的構成指標を組み立てた。

表2 一般群と非行群との比較（ロールシャッハ・テスト）

研究者	分析の特徴	非行群の特徴
高橋雅春 (1956)	Klopfer, B.法。独自の臨床反応型を準備している。	人格が硬く、感情生活が貧困で、未成熟な精神構造を示す。知的には批判力を欠き、内省力・自発性なく、新場面への順応性に劣っている。感情的には幼稚で不安定であり、愛情の阻害感や不安感を有している。また、生活空間は自己中心的に狭く、興味の範囲が限られ、対人関心が少ない。
市村潤・当田修久 (1963)	DeVos, G.の感情カテゴリーを活用している。	精神病質と診断される非行少年は、不安感情のカテゴリーにおいて有意に高く、依存感情および快的感情のカテゴリーにおいて有意に低い。特に、感情カテゴリーが精神病質非行少年の感情構造を解明する有力な臨床的な手がかりとなる。
Siegfried, K. (1970)	因子分析。	差がない。
Curtiss, G., Feczko, M.D. & Marohn, R.C. (1979)	Beck, J.法。線形判別分析。	受動的な認知様式を有し、衝動性が高い。

Richardson, L.M. (1982) は、法律上の罪と精神医学的な診断に基づき少年犯罪者を識別するにあたって、MMP I とロ・テストがパーソナリティの測度として有効であることを実証した。

Chomyn, T.J. (1986) は、行為障害の青年男子を重度行為障害と軽度行為障害の2群に分類し、Exner, J.E.の包括システムによって実施され、スコアされた構造一覧表 (Structural Summary form) の81の測度を予測的判別分析 (predictive discriminant analysis) によって分析し、両群を識別する測度を抽出した。

Thompson, S. (1988) は、攻撃型行為障害と非攻撃型行為障害と診断された非行少年のロ・反応を用いて、パーソナリティの適応傾向 (adaptive trend) と衝動傾向 (impulsive trend) を測定する、二つの尺度を開発した。

以上のように、1980年代までは、「非行性とはなにか」という基本命題には正面からぶつかることを避け、非行の発現になんらかの影響を及ぼす衝動性に目を向けた研究および

非行性の深度と密接なかかわりをもつ精神病質および／または行為障害を一般群ないし軽度の障害群から識別する研究が、多く実施されてきた。

#### b. T A T

T A Tの文献は、6編で、ロ・テストの37.5パーセントにとどまっている。その分、実施や解釈が難しいと言えるが、非行性を理解するにあたって無視できない貴重な研究も、いくつかある。

Lyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958) は、従来の研究から、非行少年男子に見られる特性は、主張性、破壊性 (Glueck, S. & Glueck, E., 1950)、外向性 (Eysenck, H.J., 1955)、外罰性 (Grygier, T., 1954)、不安定な行動 (頻回転職、ずる休みなど) および反社会的行動 (Barry, J.V. *et al.*, 1956) であるとし、これらにヒントを得て、被験者が物語に登場するキャラクターの非行少年的な特性または非行少年的な特性に自己同一視すると考え、表3に示すような基準をプールしておくことを提唱した。

表3 T A T の 判 定 基 準

対 象	基 準
非 行 少 年	(1) 罪を回避する機制または罪へのとらわれを伴わない、攻撃的同一視 (結果についての恐怖が強調された場合には、これは、罪であると見なされなかった。) (a) 行動に移さない攻撃感情 (b) 攻撃的破壊的行動 (2) 不安定なキャラクターへの同一視 (a) 権威を無視する；同調しながらない；離脱する、あるいは家族の輪の外にとどまる。 (b) 他者との不安定な関係 (c) 同一視対象者は、裏切られる、あるいは裏切られることを恐れる。 (3) 罪を回避する機制または罪へのとらわれを伴わない、反社会的ないし非社会的同一視 (a) 盗み、贈賄およびその他の反社会的同一視 (b) 快樂主義的同一視、金銭へのとらわれ (金銭=愛情)
非 非 行 少 年	(1) 罪を回避する機制または罪へのとらわれを伴う、攻撃的または反社会的同一視 (a) 自己と攻撃的社会的行為との距離、例えば、場所と時間における距離、キャラクターの名づけ、脚色 (キャラクターが映画とか小説におけるように、'非現実的'である。) (b) 行動のための情状酌量、例えば、他者に強制される；自我統制の偶発的、一時的な喪失 (飲酒、精神異常)；行動に対する道徳的な正当化。 (2) 罪の反応、例えば、犯罪を防止するため、運命が介入する、自己を放棄する、自殺を企てる (結果の恐怖によるばかりではない。) (3) 安定したキャラクターとの同一視；家族結合；強調された安定した関係。 (4) 社会的価値との同一視 (a) 強調された社会的ないし道徳的価値；'正義'を実行する；高潔に誘惑を打ち負かす；罪の償いをする、など。 (b) 社会的な業績；価値のある行為または目標

Lyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958) による。

Silver, A.W. (1963) は、精神病質の特徴を有する男子非行少年が、MMP I の精神病質的偏倚尺度 (Pd) とTATに関して、三つの統制群と有意に異なっていると報告した。

Born, M. (1975) は、非行少年の自我の機能を六つの機能 (時機を失しないインサクション (insertion in time)、要求不満の耐性、自我の価値上げ、他者との関係、衝動の統制および社会的知覚と役割取得) に対して-2から+2までの得点を与えることによって分析し、正常、非行、神経症の若者たちの間を有意に識別することができた。

Munekata, H. (1983) は、TATに基づく対人的価値についての投射的測度を構成し、自己報告の質問紙との関係からその妥当性と信頼性を調査した上で、非行少年は、非非行少年と比べ、父-子場面における独立と勇気に関連するアイテムに関して有意に低い得点を示すと報告した。

Okruhlicová, A. (1977) は、非非行少女と比較して、13.5-17歳の非行少女における早期の性経験と攻撃性との関係を研究し、非行のある被験者は非非行少年よりも攻撃的で、早い時期に性交していることを見いだした。

Mishra, J.P., Shukla, T.R. & Agnihotri, A.N.

(1984) は、パーソナリティの情緒的側面を含む六つのTATの変数、すなわち、楽天主義、愛情、幸福、安全、性的な願望および攻撃的な感情について、犯罪者群と正常者群とを比較し、犯罪者群は、楽天主義、愛情、幸福および安全において有意に高い得点、性的な願望および攻撃的な感情において有意に低い得点を示すことを見だし、犯罪行動の特徴は、未成熟性、自己中心性、願望の直接的充足、暴力行為および要求不満であると結論した。

このように、TATについては、多様な研究が進められ、研究の方向性を見だし得ない状況にある。

### (3) 方法論上の利点

ロ・テストとTATは共に、スコア化が難しく、主観的な評定に頼らざるを得ず、技術的に多くの難題を抱えているが、描画法、目録法 (inventory) 等にはない利点を有している。

ロ・テストでは、早い時期では、Schachtel E.G. (1951) の特性分析、DeVos, G. (1952) の感情カテゴリーが、非行少年の特質や非行性を分析するのに便利な道具として活用されていた。

1980年代以降、Exner, J.E. の包括システム (Comprehensive System : CS) が頻りに利用され始めたことは、注目に値する。さきに紹介した文献では、Richardson, L.M. (1982) およびChomyn, T.J. (1986) のものがそうであるが、のちに紹介する1990年以降の文献では実に7編中5編が直接、間接にCSを活用したものである。

TATでは、かなり古いが、表3に示したLyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958) の非行少年および非非行少年の判定基準を推奨することができる。この基準は、非行少年を査定する業務に携わってきた二人のサイコロジストに、解釈に入る前に文章化してもらったものであるが、非行少年のパーソナリティを非行性のアセスメントとの関連でとらえる際に、彼らのパーソナリティ自体をどのような枠組

みからとらえるか、あらかじめ準備しておかなければならないことを、示唆するものである。

### (4) 最近の研究動向

1990年以降に発表された文献は、ロ・テストでは7編あるが、TATでは皆無ある。

ロ・テストでは、Loftis, R.H. (1997) およびWeizmann-Henelius, G., Ilonen, T., Viemerö, V. & Eronen, M. (2006) は、それぞれ非行少年と非非行少年、女子の犯罪者と非犯罪者とを比較し、古典的な研究を実施しているが、後者は、攻撃性の3変数を扱い、以下に述べる攻撃性の研究と方法論的に類似している。

残りの5編は、次のように二つに群に分けることができよう。一つは、非行予測を扱ったもので、成人後の重罪犯罪の予測をしたAnderson, L.E. & Walsh, J.A. (1998) の研究および幼児期のロールシャッハのデータから青年および成人の非行性を予測したJanson, H. & Stattin, H. (2003) の研究の二つが、そうである。投映法による非行予測の研究は、とても希少である。

他の一つは、精神病質のアセスメントを扱ったもので、3編ある。Loving, J.L. Jr. & Russell, W.F. (2000) は、Hare精神病質チェックリスト-改訂版の青年版によって測定される精神病質のレベルによって3群を設定し、群間に統計的な有意差があることを見だした。

Hartmann, E., Nørbech, P. B. & Grønnerød, C. (2006) は、受刑中の暴力犯罪者で、精神病質であったものと精神医学的治療を受けていた非精神病質であったもの、精神分裂病の入院患者および大学生を対象に、包括システムの変数と、Meloy, J.R. & Gacono, C.B. の攻撃性の変数の識別および収束の妥当性を分析した。

Ballard, D.W. (2006) は、精神病質および非精神病質で男子の少年犯罪者の攻撃性：過去 (AgPast)、攻撃性：潜在能力 (AgPot)、攻撃性：内容 (AgC) および攻撃性：運動 (Ag) を、精神病質の水準、犯罪歴、行為障



害および選定されたロールシャッハ変数に関して調査した。

いま、なぜ、精神病質を取り上げるか疑問なしとしないが、今年、発表されたBallard, D.W.の文献にのみじくも象徴されるように、また、Liebman, S. J., Porcerelli, J. & Abell, S. C. (2005) のロ・テストの信頼性と妥当性の研究にも代表されるように、パーソナリティの偏りと攻撃性についての研究が非行性のアセスメントの分野で重要な役割を果たしていることは、疑い得ない事実である。

## 5 総括と今後の課題

この研究は、ロ・テストおよびTATによる非行性のアセスメントに関する方法論上の妥当かつ効果的な情報を入手することを目的とする。

内外の文献検索情報等を利用し、収集した文献、ロ・テスト63編およびTAT28編のうち、非行性を査定する構造化を有し(第一次選定)、かつ、標準化されたスコアリング・システムを導入しているか、理論的に非行ないし非行少年を理解しようとしているか、のいずれかの条件を満たす(第二次選定)ロ・テスト16編およびTAT6編を取り上げ、(1) 非行性のアセスメントへの寄与、(2) 方法論上の利点、(3) 最近の研究動向、について分析する。

得られた主な結果は、次のとおりである。

- (1) TATの文献は、ロ・テストの37.5パーセントにとどまり、1990年以降は皆無である。
- (2) ロ・テストでは、1980年代まで、非行の発現になんらかの影響を及ぼす衝動性に目を向けた研究ならびに非行性の深度と密接なかわりをもつ精神病質および／または行為障害を一般群ないし軽度の障害群から識別する研究が、多く実施されている。
- (3) ロ・テストでは、1990年代以降、精神病質および／または攻撃性について

の研究が、かなり増加している。

- (4) 1980年代以降、Exner, J.E.の包括システムが非行臨床の場で重視されてきている。

これらの結果に基づき、ロ・テストおよびTATによる非行性のアセスメントに関する今後の課題を整理すると、次のとおりである。

一つは、非行性のとらえ方にかかわる課題である。英語の「delinquency」は、元来、日本語の「非行性」よりは多義的であるが、日本語の「非行性」にしても、とてもあいまいな使われ方をしているのが、実情である。その証拠に、非行少年の対照群としてしばしば高校生や大学生が使用される。また、精神病質であれば、または、少年院に収容されていれば、非行性が進んでいると安易に考えられがちである。ここは、Lyle, J. G. & Gilchrist, A. A. (1958) が非行少年および非非行少年の判定基準を作成したように、非行臨床の専門家が、あらかじめ「非行性を査定する基準」を作成し、一つの枠組みに沿って非行性を査定する必要がある。

二つは、スコアリング・システムにかかわる課題である。テストの指標・比率によって単純に群間を比較した研究は論外であるが、やはり切れ味の良いスコアリング・システムを採用していく必要がある。Exner, J.E.の包括システムが非行臨床の場で重用されてきているが、彼の「構造一覧表」によって総合的に理解するにしても、非行性のアセスメントにあたって、どの変数に切り込んでいけばよいか、戦略的に検討していかなければならない。

三つは、1990年以降のロ・テストでは、パーソナリティの偏りと攻撃性についての研究が非行性のアセスメントの分野で重要な役割を果たしているが、わが国では、精神病質は死語に近い状況にあるほか、非行少年を効果的に処遇する方法の開発が強く要請されている今日の状況を勘案すれば、むしろ行為障害の非行少年における非行発生のメカニズム

を、特に衝動性および／または攻撃性に焦点を当てて分析していくことが、より実際的である。

## 引用文献

### (1) 分析の対象としたロールシャッハ・テスト関係文献

- Anderson, L.E., and Walsh, J.A. 1998 Prediction of adult criminal status from juvenile psychological assessment. *Criminal Justice and Behavior*, 25(2), 226-239
- Ballard, D.W. 2006 Rorschach aggression variables of male juvenile offenders. *Dissertation Abstracts International*, 66(9-B), 5076.
- Chomyn, T.J. 1986 The Rorschach: A classification analysis for mild and severe conduct disordered adolescent males. *Dissertation Abstracts International*, 46(9-B), 3253.
- Curtiss, G., Feczko, M.D., and Marohn, R.C. 1979 Rorschach differences in normal and delinquent White male adolescents: A discriminant function analysis. *Journal of Youth and Adolescence*, 8(4), 379-392.
- Hartmann, E., Nørbech, P.B., and Grønnerød, C. 2006 Psychopathic and nonpsychopathic violent offenders on the Rorschach: Discriminative features and comparisons with schizophrenic inpatient and university student samples. *Journal of Personality Assessment*, 86(3), 291-305.
- 市村潤・当田修久 1963 精神病質非行少年のAffectについて 調研紀要 4 13-17
- Janson, H., and Stattin, H. 2003 Prediction of adolescent and adult from childhood Rorschach ratings. *Journal of Personality Assessment*, 81(1), 51-63.
- Loftis, R.H. 1997 A comparison of delinquents and nondelinquents on Rorschach measures of object relationships and attachment: Implications for conduct disorder, antisocial personality disorder, and psychopathy. *Dissertation Abstracts International*, 58(5-B), 2720.
- Loving, J.L. Jr., and Russell, W.F. 2000 Selected Rorschach variables of psychopathic juvenile offenders. *Journal of Personality Assessment*, 75(1), 126-142.
- Ostrov, E., Offer, D., Marohn, R.C., and Rosenwein, T. 1972 The "impulsivity index": Its application

to juvenile delinquency. *Journal of Youth and Adolescence*, 1(2), 179-196.

- Richardson, L.M. 1982 The concurrent validity of the MMPI versus the Rorschach in discriminating offense type and psychiatric diagnosis among juvenile offenders. *Dissertation Abstracts International*, 43(1-B), 261.
- Schachtel, E.G. 1951 Notes on Rorschach Tests of 500 juvenile delinquents and a control group of 500 non-delinquent adolescents. *Journal of Projective Techniques*, 15, 144-172.
- Siegfried, K. 1970 Juvenile delinquency and the Rorschach. *Psychologie v Ekonomické Praxi*, 29(1-2), 334-343.
- 高橋雅春 1956 非行少年のロールシャッハ反応 西京大学学術報告 141-148
- Thompson, S. 1988 The use of the Rorschach Test in differentiating aggressive and nonaggressive conduct disorders. *Dissertation Abstract International*, 48(7-B), 2112.
- Weizmann-Henelius, G., Ilonen, T., Viemerö, V., and Eronen, M. 2006 A Comparison of selected Rorschach variables of violent female offenders and female non-offenders. *Behavioral Sciences and the Law*, 24(2), 199-213.
- ### (2) 分析の対象としたTAT関係文献
- Born, M. 1975 Attempts at a quantitative approach to the functions of the self in the TAT. *Revue de Psychologie et des Sciences de l'Education*, 10(4), 435-444.
- Lyle, J. G., and Gilchrist, A. A. 1958 Problems of T.A.T. interpretation and the diagnosis of delinquent trends. *British Journal of Medical Psychology*, 31, 51-59.
- Mishra, J.P., Shukla, T.R., and Agnihotri, A.N. 1984 A study of criminals with the help of T. A. T. *Indian Journal of Clinical Psychology*, 11(2), 19-21.
- Munekata, H. 1983 A projective measure of interpersonal values. *Japanese Journal of Educational Psychology*. 31(4), 283-291. (宗方比佐子 1983 投影法による対人的価値観の測定 教育心理学研究 31(4) 283-291)
- Okruhlicová, A. 1977 Some psychological characteristics of delinquent girls. *Psychológia a Patopsychológia Dietata*, 12(3), 221-228.
- Silver, A.W. 1963 TAT and MMPI psychopath deviant scale differences between delinquents and

- nondelinquent adolescents. *Journal of Consulting Psychology*, 27(4), 370.
- (3) その他
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1963 *Adolescent personality and behavior. MMPI patterns of normal, delinquent, dropout, and other outcomes*. University of Minnesota Press.
- Haynes, J.P., and Peltier, J. 1985 Patterns of practice with the TAT in juvenile forensic settings. *Journal of Personality Assessment*, 49(1), 26-29.
- Liebman, S. J., Porcerelli, J., and Abell, S. C. 2005 Reliability and validity of Rorschach aggression variables with a sample of adjudicated adolescents. *Journal of Personality Assessment*, 85(1), 33-39.
- Sciara, A.D. 1990 Rorschach Inkblot Test interpretation and adolescent forensic evaluation. *Forensic Report*, 3(1), 49-75.
- 進藤 暉 1971 非行性診断における心理検査のあり方の検討(1) 日本心理学会第35回大会発表論文集 203・204

---

### < 要旨 >

この研究は、ロールシャッハ・テストおよびTATによる非行性のアセスメントに関する方法論上の妥当かつ効果的な情報を入手することを目的としたものである。集められた63編のロールシャッハ・テストおよび28編のTATの文献の中から、この研究の目的に沿って、それぞれ16編、6編の文献が、選定され、主として(1) 非行性のアセスメントへの寄与、(2) 方法論上の利点、について分析された。

その結果、ロールシャッハ・テストでは、(1) 1980年代まで、非行の発現になんらかの影響を及ぼすと思われる衝動性に目を向けた研究ならびに非行性の深度と密接なかわりをもつ精神病質および／または行為障害を一般群ないし軽度の障害群から識別する研究が、多く実施されてき、また、(2) 1990年代以降、精神病質および／または攻撃性についての研究が、増加してきている、ことが見いだされた。

これらの所見は、わが国では、今後、ロールシャッハ・テストによって、行為障害の非行少年における非行発生のメカニズムを、特に衝動性および／または攻撃性に焦点を当てて分析することが、より実際的であることを示唆する。

---